

息子が肝臓をくれないから太郎さんから説得してほしいとかいうのも大分あったようだね。

僕が移植手術を受けた間に、移植手術が何件かあったけれども、それはみんな子供でした。お母さんが子供に肝臓を上げるというのが多かったですね。

○紅谷 調べてみましたら、先生が移植手術を受けた平成十四年に、生体肝移植はもう数千の事例があったのですが、高齢での生体肝移植というのは本当に事例が少なく、太郎さんも、後から調べてみたら手術前の認識と違うことが随分あったと話されていたようです。

○河野 太郎の妻は、子供ができたのに夫がリスクのある手術を受けるというので、すごく動揺したと思うんだよね。だけれども、止めてほしいとは言えないから、どうしていいか分からなかったみたいだね。

それで、太郎は嫁さんを説得するのに、科学的にちゃんと説明ができればいいと言って、アメリカの資料なんかをこっそり集めて、とにかくドナーが死ぬ心配はない、死んだ例はないということをお文のようにずっと唱え続けたけれど、後で聞いたら本当は死んだ人もいたというんだ。ただ、絶対そういうことはないと思っていたんですよ。

《第七十一代衆議院議長》

○紅谷 肝臓の移植手術が終わって、御自分では政治活動はちよつと厳しいのではないか、次の選挙に出ることは難しいのではないかと思われていたというお話でした。

平成十四年四月に手術して六月に退院され、その後、解散が一年半ぐらになかったというのもあったのでしょうか、選挙に出ようという決断をされるまでの経過をお聞きしたいと思います。

○河野 手術をする前は、大体寿命が尽きて余命半年くらいかなと思っていたから、自分でも覚悟を決めていたんです。

だから、手術のときは、政界に復帰するどころか生き延びるかどうかだけです。手術も大変な手術で、退院まで二か月ほどかかりました。

退院したときは、これでしたら生き延びられるなという思いだけでした。

退院から二、三か月は感染症が危ないから、道を歩いていても工事現場や家を壊している現場が一番危ないと言われたり、あれは食べちゃいけない何しちやいけないと、とにかく生きるだけで精一杯でした。

でも、それから段々回復して、十月、十一月ぐらいには議員仲間の会にも出るようになっていたんです。出たからといっても、それだけのことでした。

そうしているうちに解散になったものだから、選挙に出るか出ないかを真剣に考え、この一年半で体力は相当戻ってきていたし、やれないことはないなと思っていたら、みんながやったらどうだと言ってくれて、それじゃ、やってみるかとなったのが六十六歳のときです。

なかなか大変な選挙だったけれども、何とか当選したんです。

○紅谷 手術から選挙に出られるまでの間は小泉内閣でした。その間に、国会ではイラク派遣法が審議され、自衛隊の海外派遣が争点でしたから、小泉総理は慎重を期されたのか、総理・総裁経験者を呼んで意見を聞くという場面がありました。それが手術をされた翌年の春でした。

○河野 そんなこともあって、自分は政治の世界にいるんだという自覚が出ましたね。

イラク問題を前に、アメリカのイラク攻撃に日本がどういう態度

を取るかということ、小泉さんが呼んだんです。

それともう一つ、小泉さんは、平壤に行ったりして北に対する関心度がすごく高かったんです。

それで、中曽根、宮沢、橋本、森、僕の五人が呼ばれて、少し慎重に身内の意見を聞こうということでした。

そこでは、橋本さんも森さんも、今後北朝鮮の危険があるからアメリカとはできるだけ仲よくしておいた方がいい、アメリカがイラクへ行くと言うなら賛成しておいた方がいい。そうしないと北から何かがあったときに本当にアメリカが守ってくれるかどうかみたいなことを言っていました。

それで、僕は、それはおかしんじゃないかと思って、余りアメリカのイラク侵攻を支持するとは言うべきではないという意見を言ったけど、例によって少数意見でした。中曽根、森、橋本の三人は、積極的にアメリカを支持しろと言う。宮沢さんはそこは少し違っていました。

小泉さんは、意見を聞くだけ聞きましたが、もうアメリカを支持してイラクに自衛隊を出すことに決めていましたね。

そういうことがありました。

○紅谷 平成十五年十月十日に解散になり、十一月中旬の選挙でしたが、その頃はもう随分元気になられ、地元の人にも元気な姿を見せられたのですね。

○河野 そうでした。

それでも、地元からは、調子がいいからといって余り無理しちゃいけないとか、よそへ応援に歩いたりなんかはできるだけするなど大分言われ、分かったと言って極力減らしてはいたけど、何か所かには応援に行きました。それでも自分の選挙を一生懸命やって当選したんです。

○紅谷 当選されて直ぐに議長就任の打診があったようですが、ど

ういう経緯だったのでしょうか。

○河野 当選年次と年齢から名前が挙がっていたのは、中山太郎さん、武藤嘉文さん、僕の三人で、中山さんは、参議院から回ってきたから衆議院の当選年次は少ないけれども、政治家としてのキャリアが長いのと年齢が一番上。武藤さんは、僕と当選同期でずっと一緒にやってきたけど、彼の方が少し年上だった。

だから、僕は武藤さんが議長になるだろうと思っていたら、突然森喜朗さんがやって来て、河野さん、あなたが議長をやって下さい。イラク問題やら何やらいろいろ問題が多いし、野党が今度の選挙で大分勢いづいているから、野党とちゃんと話ができないと駄目だから、あなたがやるべきだと。ただ、イラク問題にあなたは余り賛成ではないようだけど、イラク関係の案件が出たときに余り持論、自説にこだわらないでくれという話をしながら、大部分の人はもう河野議長でいこうと思っているから、あなたはそのとき断らないでくれと言われたんです。

実は、伊藤宗一郎さんが議長になったときに、橋本総裁、加藤幹事長が僕を棚上げにしようと思っただけ議長就任の打診があつて、僕はそれを断っていたんです。一度断っているから、森さんは声がかかったらまた断るなど飛んできたんだ。僕はまだ打診もないのに、断る、断るなど言ってもしようがないと言っているうちに、そういうことになったんです。

○紅谷 自民党は選挙で圧勝していましたから、各派協議会では、議長は自民党からということ、全く異論がなかったわけで、自民党内の人事という言い方をしているのかどうかは分かりませんが、当然小泉総裁が了承されて、森さんが動かされたということなのでしょうね。

○河野 僕は、総理が内閣の人事をやり、自民党内の人事は総裁としてやるのは分かるけれども、立法府の議長の人事まで総理・総裁

がいいとか悪いとかと言うのはおかしいんじゃないかと思っ
ていたけど、まあ、一連の与党の人事みたいなものですよ
ね。

○紅谷 選挙では、与党で過半数を超える圧倒的な多数を取
つていますが、民主党も百八十議席でしたので、やはり、議
長選挙では、野党も納得できる全会一致になるような人とい
うのは、森先生が言われるとおりでと思います。

○河野 そう思っていたかもしれないね。なるべく全会一致
がいいから、森さんがきつと走り回ったんだろうね。

○築山〔衆議院事務局〕 正式な就任の打診というのはど
こかから来たのですか。森先生を介しただけで終わっている
のですか。

○河野 全然なかったね。

あとは本会議直前の代議士会で、議長選挙があります、
我が党は河野さんを推挙しますと幹事長が言って、おお、そ
ういうものかなと思いましたが。

○紅谷 二回目の議長るときは、選挙の翌日でしたが、小
泉総理から、次も議長をやってほしいと電話があったと言
っておられましたね。

○河野 二回目は異例だね。誰かに替わってもおかしくな
ったですよ。

○紅谷 過去に議長への就任を断られたということですが、
今回は躊躇されながらも受けられました。河野先生がお考えだ
った議長像、議長の方というのはどういうものだったのだ
でしょうか。

○河野 議長という職は、個人の主義主張を表現できない
というか、中立を保ってはいけなくてはいけません。それが
ちょっと僕には辛かったですよ。

どんどん右派が強くなってくる中で、これ以上強くな
ったときには自民党の中で相当闘わなきゃいけないと思っ
ていたから、議長になつて一切発言も行動もできないとい
うことになる、もう座して

右派の蹂躪を見るしかないというのは嫌だと思つたし、
そんな時は身を挺して止めなきゃいけない場面が来るだ
ろうから、議長席にいたのではそういうことができない
から議長はやりませんと言つて、一回目の打診のときに
断つたんです。

二回目の打診のときにも、さらに状況は悪くなつて
いたから、こういうときに受けて議長席に座つていいの
かなと思いましたが、それで、ちよつと迷つて宮沢さん
に相談したんです。

一回目の打診のときにも宮沢さんに話をしたら、お断
りになつた方がいいでしょうという話でした。そのとき
は率直に、議長をやつたら総理はできないよ、あなた
は総理を目指しているのだから議長をやらない方が
いいという、あの人は直接は言わなかったけれど、
そういうニュアンスでした。僕は右と闘うためにと思
つたので、一回目は断つたんです。

二回目の打診のときには、それは是非お受けなさいと
宮沢さんから言われて、議長は国会議員にとつて一番
名誉なことだから断るのをおかしい。受けて議長とし
て職責を全うすることを考えられたらいいと言われ
ました。

それで腹が固まつて、受けますという返事をした
んです。

○紅谷 そこでリセットされて、これから議長になつ
て何かをやるうという思いを持たれたのでしょうか。

○河野 それはあつたんですよ。

やはり議会の中が荒れていたし、それと何よりも、
小泉総理の靖国神社参拝が続いて日中関係がとて
も悪くなつていましたから、議長になつて割と早い
時期に訪中したんです。

○紅谷 十一月に就任されて、翌年九月の訪中
でした。アメリカでのG8議長会議に行つた直後に、
中国に行つて日中議員交流をスタートさせて、日
中間の関係改善を進められました。

叔父の河野謙三参議院議長を間近で見
ておりましたが、議長就

任に当たって、参考にしようと思われたことはあったのでしょうか。
○河野 謙三と僕とは議長になる経過が大分違って、謙三の方は非常に異例な形ですから、同じようにとはいかないのは分かっています。

謙三議長は、議長は真つすぐ正面を向いていればいいというものじゃない、七、三に構えろ、野党七に与党三、七分、三分の構え。いつも七、三に構えるのが正しいという話をよくしていました。だから、そういうのは頭にありましたね。

それと同じ趣旨だけど、やはり何といっても、民主主義というのは多数決が基本だから、それだけに少数意見の尊重が大事だと。少数意見を尊重した上で多数決で決めるべきで、いきなり多数決では民主主義ならぬのだというのは、謙三議長がしょっちゅう言っていたことでした。

謙三議長からは、しばしばそうした注意を断片的に聞いていました。例えば、打撃の極意は球をできるだけ引きつけてから打て、球を打ちに行ったら絶対駄目だと言っていました。

つまり、議長は調整を上手にやるためには、余り早くから出ないで、言葉は悪いけれども、もう困り果ててへとへとになってから出ていった方ができるんだとも言っていました。

○紅谷 お話のように、河野謙三議長は、議会というのは多数決だけれども、なるべく少数意見を尊重しなくてはいけない。少数意見の尊重とは何かといったら、できるだけ野党の意見を取り入れることだとおっしゃっていました。自民党内では、河野議長も簡単には本会議のベルを押してくれないのではないかとか、河野議長はどうか考えているのかと疑心暗鬼で、数の多い自民党を抑えるには非常に効果的だったと思います。

○河野 だから、おそらく僕が議長になって審議時間は長くなったでしょうね。



ただ、僕がとても気になったのは、しようがないけれども、何時間審議をやったからといって審議を時間で測ることでした。それは本当はやはり中身で測って、二十時間やっただけで同じ答弁しかなかったので何時間やっただけで、たとえ三時間でも、それによって新しい提案や考え方が出てくれば、その方が価値があるんだけれども中身は評価できないからね。だから、どうしたって評価するには、何時間やっただけで済ませよう。議論をどれだけ尽くしたかとならないと駄目だと思っただけでもね。

○紅谷 私に議長秘書の時に、自民党の国対委員長筋から、委員会では与党だけが質疑を終えた状況なんだけど、これで採決したら河野議長はベルを押してくれるかと聞いてこられるものだから、野党が一切質疑していないのに採決したのでは、議長がベルを押すことは絶対ありませんよと押し返したことがありました。

○河野 それはそうですよ。
僕が議長で、大島さんが自民の国対委員長だったのが物すごく助かりましたね。大島国対委員長と公明党は漆原国対委員長、二人が与党にいて、野党には共産党の穀田国対委員長がいて、他の野党がボイコットしても共産党だけは出てくれるとかということがありましたね。だから与党単独というのはあの頃はなかったと思うんです。
○小田〔衆議院事務局〕 副議長との関係についてですが、議長在任中、一期目は中野寛成先生、二期目は横路孝弘先生が副議長を務められました。河野先生は、円滑な国会運営は副議長との信頼関係が欠かせず、人材には恵まれたとおっしゃっていた記事を読ませていただいたのですが、副議長との関係をお聞かせください。
○河野 中野さんは、弁も立つし人間関係も広い人でした。それほど昔から知っている人ではなかったけれど、副議長になられてから、いろいろな話をしてくれて、野党の立場をよく理解できました。横路さんとは、僕が当選したときは、まだお父さんが予算委員会

で質疑していました。それでもとても長い付き合いで、社会党の中で抜けた存在である一方、多少、煙たい存在でもありました。弁護士なので、いわゆるたたき上げの組合出身の議員とはちよつと違っていましたね。理論派でもよく勉強する人だったものだから、僕は若い議員の頃から横路さんのことはよく知っていたんです。

その頃の僕は、社会党系といえれば横路さんとか、ちよつと後だけでも江田五月さんとかと仲がよかつたから、横路さんが副議長の時とは助かりました。ただ、彼は、僕がいろいろ注文を出して、民主党内をもう少し何とかしてほしいと言っても、民主党の中はちよつと難しかつたみたいですね。でも、民主党から出てきた副議長だから、この人とかちゃんと話をしなければ駄目だと思つたから、できるだけ同席してもらいながらやりましたね。

お二人には、僕がいろいろとお願いすることが多かつたので、ご迷惑をおかけしたと思います。

《米国下院及び中国全人代との議会間交流》

○紅谷 河野議長が就任されて最初に取り組まれたのが、米国下院と中国全人代との議会間交流でした。

衆議院は、両国とは議員派遣等での個別交流はありましたが、議会の正式な交流はありませんでした。

そういう中で、河野議長は、アメリカと中国との議会間交流を提案され進められましたが、この二国間との議会間交流を始めようと思われた切っ掛けは何だったのでしょうか。

○河野 アメリカと二国間の議員交流をやるべきだと思つたのは、沖縄問題なんです。

僕は外務大臣でしたけれども、沖縄問題はうまくいかないんです。それは何故かというと、政府間は話ができるけれど、沖縄の現地の

状況がどれほどアメリカに伝わっているかがとても不安でした。だから、こんなことを言っただけとはいかないのだから、外務省は、アメリカから言われれば、それでいきましたよと言うけど、沖縄の現地はそう簡単じゃなかったんですよ。

だから、約束はしても実態はなかなか進まない。今やっている工事も進まないし、いろいろな方針がなかなか進まない。するとアメリカはいらいらして何だ何だと言いつつ、アメリカがいらいらすると、今度は上から沖縄に圧力がかかる。そうすると余計反発が出る。

2プラス2なんかでも、沖縄の実態を考えれば無理だと思うけれど、政府間では話がどんどん進むんですよ。アメリカがどれだけ現状を知っているか、それを僕らはとても心配していました。ところが僕らよりもっと早くから心配していたのが、アメリカ上院議員のダニエル・イノウエさんです。

彼は、僕が行くよりも多いぐらい沖縄に行つて、沖縄の現状をかなりつぶさに見て、政府間の交渉と現状がはるかに違うということを知っていた。だから、彼はアメリカの沖縄政策はうまくいかない、沖縄に基地をどんどん造つて固めていこうとしているけど、それは駄目ではないかと言っていたんです。

僕は、それをダニエル・イノウエさんからも聞いていたし、それから、これは政府間でどんどん進むけれども、実際に進めるには議会同士が話をして、日本の議員は沖縄の実情をできるだけ吸い上げて、アメリカは防衛関係だとか政府の考え方をできるだけ持つて議会間で議論をすれば、沖縄問題のかけ違っているものが合うんじゃないかと思っただけなんです。

だから、日米の議員間交流、議員間の議論というのがすごく重要で、これをちゃんとやらない限りは沖縄はうまくいかないよ、僕は外務大臣当時から思っていたし、議長になつてからは、一番これが大事だと思っていました。

○紅谷 日中よりも日米の議会間交流の方を、むしろ先に必要性を感じられていたのですね。

○河野 そう思っていました。

だから、日米をどうしてもやりたいと思っただけで、なかなかうまくいかないんですよ。

ダニエル・イノウエさんは一生懸命だけど、彼は上院議員だから、カウンタートパートは公式に言えば日本では参議院で、彼はよく分かっている、沖縄選出の衆議院議員が一番実情をよく知っているから、参議院ではなく衆議院とやらなきゃ駄目だと言うけど、そうすると、たすきがけみたいになるんだよね。アメリカの上院と日本の下院の衆議院とが議員交流をやるといふ感じですよ。

ダニエル・イノウエはとても心配して、衆議院はしよつちゅう解散して落ち着かない、それはアメリカの下院も任期は二年で選挙ばかりやっている。もうちよつと中期の話し合いをじっくりやるならば、構造的には参議院だけれども、沖縄の現状をどれだけ吸い上げて知っているかというのは不安だったようなんです。

沖縄問題をやるには絶対こういうのが必要だと僕は随分言い、ダニエル・イノウエさんも、政府同士が机の上で議論していても駄目だ、現場は全然違うということを彼は分かっていましたからね。

だから、本当に重要だと思っただけでも、今言った理由もあって、日米の議員交流というのは進まないんです。

○紅谷 河野議長がハスタート下院議長と合意した、衆議院と下院との議会交流は実現しなかったのですが、ダニエル・イノウエと、衆参の議員との交流が公式になつて、二、三回はやっていると思いません。

○河野 それは、やらないよりはるかにいいので大事だと思うけど、僕が当初考えていたような、沖縄問題であるとか辺野古問題であるとかというテーマを決めて、専門家同士がきちんと議論できる場だ

とよかったんだけどね。

アメリカは、ダニエル・イノウエさんと、テッド・ステイーブンスさんが一生懸命でしたが、ダニエル・イノウエという人は、ちょっと前までは反目的で手に負えなかったと言う人もいました。物すごく日本に厳しくて、外務省なんかは逃げて歩いた。しかし、最近物は物すごく親目的になって、僕は家族ぐるみの付き合いなんです。

彼はアメリカの日系米人ですから、戦時中は収容所生活をして、収容所の中から米軍に志願して戦争に行っただんです。日本と戦うかもしれないところを志願し、イタリア戦線で右腕を失くして片手でした。

僕は彼としょっちゅう食事をして遊んでいたけど、昔は気難しくて日本がやることに一々反対して、すごくきつかったです。しかし、最後は日本にいろいろなアドバイスしてくれましたね。

ダニエル・イノウエは九十近くで亡くなったけど、随分励まされたり手伝ってもらって、僕らも日米議員交流の土台を作ったつもりです。だけれども、日米交流というのは、日中もそうだけど、プロトコルの、外交的な、やあ、こんにちはこのいう議員交流をやってみようがないんで、もっと具体的な仕事をやらなきゃ駄目だと思うんですが、それがなかなかできないんだよね。

○紅谷 ダニエル・イノウエさんとの関係で、衆参の日米議員交流は何回か行われましたが、河野議長とハスタート議長とで合意された衆議院と下院との議会間交流は、具体論は進まないまま終わってしまいました。

○河野 ハスタートさんは、議長会議の前に朝食をとりながら話したら、彼はそうだと聞いたけど、彼がそんなに日本を重視しているわけでもないし、日米関係をやるうという気持ちが強かったわけじゃないから、終わってしまったんだよね。

それと、アメリカの下院議員で日本に来たことのある議員が今は

極端になくなっているでしょう。当時、中国へ行くのは増えたけど、日本へ来るのはほとんどなくなったんじゃないのかなあ。

○紅谷 下院は議員の任期が二年で、そのたびに人が入れ替わりますからね。当時調べましたら、下院議員の訪日は一年間に数人しかいませんでした。

○河野 そうだろうなあ。

ペロシ議長にも、下院議員は全然来ないと言ったんですよ。

だから、彼らが興味を持つ、意味のあるテーマの催物をやらなきゃ来ないよね。

○紅谷 日米議員交流は、ハスタート議長と合意され、ペロシ議長に交替して再確認しましたが、旗振り役がいなかったので進みませんでした。

○河野 そうだろうね、いなかったね。特に下院は、言われるように二年に一回選挙をやっているから来られないよね。

それから、ハワイとカリフォルニアにもっと日系人の議員がいてほしいですね。やはり上院議員で、日米問題を本気でやろうという人がいないと駄目ですよ。それが、ダニエル・イノウエが死んでふつり切れて、もう上院には日系人がいないだろうなあ。下院には何人かいるかもしれないね。

少なくとも僕の日米関係は、知っているアメリカ人がほとんど亡くなって切れてしまった。ジョージ・アラタニ、クリストファー元国務長官、モンデール元大使も死んでしまった。

日米関係はそういうことです。

○紅谷 日中議員交流についての経緯をお聞かせください。

○河野 日中議員交流は、やはり小泉問題でひっかかっていたから、何とかしなきゃいけないと思っただんです。それで僕は、北京へ行ってもいいよと打診したら、中国側から、議長を訪中を歓迎しますと公式に招待が来て、それで行ったんです。中国側も、小泉問題でこ

じれていたから、何とかそれを変えたいと思っていただけ、総理の問題だから転換するきっかけがなくて、それで相当無理をして、突っかかっているのを変えるのに誰かいいのはいないかというので、議長ということになった。

だから、僕が行ったら中国側は歓迎しましたね。

○紅谷 あれは本当に驚きました。胡锦涛主席はじめ、多くの要人との会談が、これでもかという程組まれていました。

○河野 僕もあんな記憶は他にないほどで、国家主席と会い、全人代議長に会い、曾慶紅副主席にも会ったね。あんなに中国の要人がみんな出てきたのは後にも先にもない大変な歓迎でした。

中国は、あれで日中関係がにらみ合って硬直しているのを変えようとしたんだけど、議長で変えるというのは相当無理だね。しかし、中国側はあれで日中関係を少し動かそうと思ってやって、あれから多少動き出したんですね。

それで、そのときに日中議員交流をやりうと話したんだけど、向こうは三千人も議員がいる中で十人派遣するというけど、どういふ人が来るか分からないし、日本側は総理が向こうを向いているから中国には余り食欲が湧いていなくて、結局、日本側は議運が中心になって受けたんですね。

議長のイニシアティブで議員交流をやりうとすると、どうしても議運になるのだからうけど、本来は外務委員会がやればもうちょっと内容のある議員交流になったかもしれないけれどもね。

○紅谷 最初は議運でよかったですよ、ずつと議運でやっている、メンバーが頻繁に替わりますから、それがどうなのかというのではありません。

○河野 常に替わるから難しいよね。日本は本当に選びようがないんだよね。日本は、中国との関係がいいぞと言うとみんな中国の方を向くし、駄目だとみんな嫌だとなって、良いときも悪いときも



つと淡々と中国問題をやりまますという人が出てこないからね。

小泉さんは毎年靖国に行き、今年はと思っていると必ず行っちゃうんだ。だから、中国問題がうまくいかなくて頭を抱えていた時、小泉内閣の福田官房長官が、靖国のほかにもう一つお参りする場所を造ろうと言つて、官房長官が諮問委員会をつくつて答申も出したけれども、これもどこかの引き出しに入つたきり出てこない。

○紅谷 中国との議会間交流は続いてはいますが、いろいろな理由で途切れ途切れになって、最近、非常に短期間で、会議はしていますが、密な会議ができるような状況にはないようです。

○小田〔衆議院事務局〕 河野先生は、議長としても外務大臣としても、様々な外交を進められました。先生個人の信頼関係や人脈によつて前進しているとも言われていますが、議員同士の信頼関係というのは、国の外交にどのような影響を及ぼすとお考えかお聞かせ願いたいと思います。

○河野 やはり、国と国との関係も結局は信頼関係なんです。信頼関係がなかったら、何をやってもうまくいかないと思います。信頼関係というのは、一朝一夕にできるものではなくて、やはり

ある程度の時間がかかつて、それから、いろいろな仕事をしながら、それが一貫してできるかできないかということで信用というのができてきますよね。

僕は、議長になつてから何をやったということは余りないと思うけど、議長になる前に相当長い時間をかけて中国問題をやってきた。しかも、やってきた長い間が日中関係が冷めた時期で、そこでずつと辛抱してやってきたから、中国側からは信用されていると自分でも思いますね。

だから、最初のころは中国へ行って誰に会いたと言つても返事もなかったけれど、今は、会いたいと言つと、あるレベルの人とは話ができますね。例えば王毅外務大臣とは、行つたら朝御飯を食べ

ようやと言つて一緒に食べるしね。

よく言われるように、冗談を言い合っているうちに、真面目には言いくいけれど、冗談の中で本当のことを言うというようなことがある。だから冗談の言い合える仲、喧嘩ができる仲、そういうことが大事なんです。

中国との付き合い方では、本気で喧嘩をしない、喧嘩をすると仲よくなるからと先輩からよく言われましたよ。本気でいろいろなことを言い合うことが大事だと思いますね。

○紅谷 人と人との関係が国と国との関係に繋がっていく、ただ、人がいなくなつたら国との関係もなくなるといふのは困つたもので、誰かが繋いでいかなければいけないのでしようが。

○河野 今はごく少なくなっているね。薄くなっているよね。アメリカとだつて、安倍晋太郎さんは、シュルツというアメリカの国務長官ととても仲がよかった。シュルツという人はまた、国務省だけじゃなくていろいろなところに、共和党、民主党を超えて、とても信頼されていた人だったからね。だから、シュルツと仲がいいということはとても大事なことでしたね。

○岡山〔衆議院事務局〕 日米も日中も日本にとって最も重要な関係で、それは議会間交流でも同じだと思うのですけれども、河野先生の御経験は大変参考になると思われまますので、両国の政治家との交流を通じて、日本の国会議員との共通点、また、相違点をお感じになつたことはあるのか、また、両国の政治家との交流を一層深めていくために、後進の日本の国会議員に、米国や中国の政治家との交流についてどのようなことを期待されるか、お教えいただければと思います。

○河野 私は、基本的に、国会議員の交流は非常に重要だと思つています。

行政府の交流、行政府は仕事で議論するけれど、国民が望んでい

るかどうか、サポートするかどうか、賛成の場合もあるし反対の場合もあるかもしれない。二国間の交流というのはそういうのをちゃんと分かって進めない、行政府だけで進めていくというのはなかなか難しいところがある。外交は政府の専権事項で確かに政府がやるけれど、国民を代表する国会がそれを理解し、サポートする体制がないと事態はなかなか進まないですね。

いつも言うことだけれども、外交というのはワンサイドゲームというのはいずれ得ない。外交が成り立つのは、両者がこれでいこうと言って手を握らなきゃ成り立たない。それは、一方が百点で片っ方が零点だったら手なんか握らない。手を握ろうと思ったら、お互いに自分自身がこれで六十点あるかなと思ひ、相手も六十点かなと思ひながら手を握ったところで外交は成立するんです。

六十点あるかないかを決めるのは、本来は国民が決める。つまり、国民を代表する国会が決めるわけで、だから条約の批准というのは国会で行われるので、一事が万事そういうことなんです。

だから、一番の例は、繰り返しになるけど沖縄問題がある。二国間では外務省と国務省では合意する、防衛省と国防省では合意する。基地を造る、移転すると、どんどん進んで行くけれど、国民はそれを必ずしも了承していない。国民全体はある程度了承していても、その当事者の沖縄県民は理解しないわけで、その理解がないところへ役所同士が合意して仕事をすすめようとすると、三年計画が、五年たっても十年たってもでき上がらないという状況になる。

アメリカの国務省なり国防省は、なぜできないのか、どうして駄目なのか。政府は、これしか方法はない、これをやりますと言っているけれども、進まない理由が実はその県の事情があるわけで、それをアメリカ側が知っていれば、アメリカ政府は、国務省なり国防省に、もうちょっと考えたらどうだと言う可能性はあるけれども、それが今のところない。

だから、議員交流というのは、それが目的ではもちろんないけど、そういうときにも、現場同士の声を聞くということは意味があるんです。国会が予算を決め行政を監督していくわけだから、その国会が相手方の都合も理解していなければできないわけで、そういうことをする必要はある。

議員交流というのは一時はやりで、やたらに議員交流といって、日米も、日中も、日英も、日仏もみなやろうと言っている。公式にはまず日米と日中だけ本格的に取り組めばいいんじゃないかと僕は思ったものだから、この二つは議長としてもやってみようという気になった。だけれども、今言うように、なかなかうまくいきませんでした。

それは、まだ下地が十分にできていないし、本格的に基礎をつくってからやらないとうまくいかない。先方にも問題はもちろんあるけれど、双方の興味、関心のすれ違いみたいなものもあってなかなかうまくいかない。やはりもう少し下地を作る必要があったんじゃないかと思ひますね。

○岡山〔衆議院事務局〕 私、国際部におりまして、大島議長の米国訪問に同行させていただいたんですけれども、そのときにペロシ議長にお会いして、私がオバマを広島に連れてきたのよとおっしゃっていました。

○河野 そうでしょう。オバマ大統領のプラハ演説は、ペロシ議長が広島でいろいろ言ったせりふとほとんど同じだもの。

○紅谷 河野議長時代に議会交流が始まりましたが、当時の胡錦濤時代と、今の習近平中国を比べると、中国は非常に力も増して日本との関係も随分変わって、日本に期待するところが余りないのかなとも思えるくらいですが、そういう中で、これからの議会交流はどう進めていくべきでしょうか。

○河野 確かに、中国は、あの頃に比べると国力が物すごくついた

から、大分状況は違いますよね。違うけれども、やはりアジアの隣国同士だから、議員交流ぐらいはなおさらしっかりやらなきゃいけないと思いますね。

元々、日中というのは、国交がない期間が相当長くて、その間の外交は議員交流でやっていたんです。それは特定の少数の人たちによる議員交流だったけれども細かい系が繋がっていた。それが、国交が正常化されてパイプも太くなって、オーソリティーを持って交流がうんと太くなった。

一番びつくりするのは、日中間の大変な数の姉妹都市提携ができて、人的交流を熱心にやっているところもあって、中国はその姉妹都市をとっても重要視しているんです。そういうことの一つで一番太いパイプが国会議員同士の交流ですよ。

だから、本当は、問題があったときに止めちや駄目なんだよね。問題があったときこそ、そこで真意を確かめ合うという議員交流というのが必要だと思いますね。

僕は議員交流の傍らで、中国共産党の中央党校、中国共産党の幹部候補生の学校と日本との交流をやったんです。

あの中央党校の生徒、卒業生というのは必ず幹部になるという路線だから、日本を理解して日本に友人や知人を持つというところはよく日本にとって大事なことです。中国のこれからの心臓部を担う人達だから、当時、曾慶紅さんが中央党校の責任者だったから、話をして中まで入れるようにしたんだけど、それが切れちゃったんだよね。曾慶紅さんとは、どんなことがあっても切らずまいと言っていたけど、やはり双方の熱意の問題で、熱意が少し冷めたということもあって切れてしまう。

中国側はとても大事にして、優秀な中央党校の生徒を毎年日本に五十人送ってきた。それに対して、日本側から行く五十人は、余り希望者がいないものだから募集の幅を広げ、そうするとレベルが下が

って、これはまずいなと思っているうちに切れちゃって、それがもう復活しないんだよね。

僕はもう一回復活させようと思つて大分やったけれども、中国側は何かぐずぐず言っていて、最後は習近平が国賓で来たときにでも話をしましようみたいなところまで行っていたんだけど、習近平の訪日がなくなったら、この復活もほとんどないだろうね。これはとても残念です。

議長としては、この議会交流はとても大事だと思うし、外務大臣としてやった中央党校との交流も、とても大事だと思つていたんです。

いずれにしても、日中関係の人的交流はとても大事で、中国から日本への観光客は、一時、九百六十万、もうちよつとで一千万人まで上がったけれども、今はコロナのせいであぐんと落ちています。中国からは約一千万人の観光客が来るのに、日本から中国に行く人は三百万人ぐらいしかいないんです。人口比でいけばそんなものだという人もいるけど、大勢行けば行くほど、その国に対する理解度が深まることは間違いないので、本当のものを目で見て、向こうの人と話し合うことで随分違ふと思うんだけど、それが今切れてしまっているのはとても残念です。

○紅谷 日本に来る外国人観光客三千万人のうちの一千万人、三分の一が中国人というのはすごい数ですよ。

○河野 そうです。

京都の観光地などは、ちよつと多過ぎて困ったなという感じだったけれど、最近行くと、やはり中国から来てほしいようですね。

中国の観光客が支えていたものは相当あるんだよね、お土産を買ったり旅館に泊まったりね。以前は、たくさん来ていると、もういいよみたいな話になるけれども、いざ止まってみると、やはりあそこが来てくれないと駄目だと言っています。

国会の議員交流も含めて、中国との関係がそういう状況なのは懸念され残念に思います。

《自衛隊のイラク派遣に係る国会承認》

○紅谷 河野先生が議長に就任されてから、自衛隊のイラク派遣に係る国会承認が提出されました。内容は派遣するための手順で、派遣そのものは、イラク人道復興支援特別措置法が解散前に成立していました。

このイラク派遣は、自衛隊の海外派遣を、今までの災害派遣や湾岸戦争の後に掃海艇を出していたのとは違い、戦闘のおそれがある地域への派遣で、少し意味合いが違う派遣だったかと思えます。

解散前に成立しましたが、衆議院での採決では、古賀誠さんや野中広務さんは欠席され、野党は出席し、これだけの法案にも拘わらず記名ではなく起立採決でした。

河野議長も賛成されたと思いますが、この法案に対する思いをお聞かせください。

○河野 海外派遣というのは、これは行くこれは行かないというのは実際はなかなか難しいんです。

明らかに戦闘に参加するとか、そこまでいなくても後方支援をするとか、あるいは、明らかに戦闘地域に行くことはしないということは、審議の過程で随分議論したわけです。小泉総理の、我々が行くところは戦闘地域じゃないとか、ちよつと訳の分からぬ答弁があったけれども、相当議論をして、それで最後は採決をするということになったんですね。

その前に、小泉さんが総理・総裁経験者を呼んでアメリカのイラク攻撃について意見を聞きたいと言い、アメリカが攻撃するのに賛成するかしないかというのが議題でした。そのときは既に話

したので省略しますが、そういうプロセスがあったものだから、僕は国会の審議での賛否は、党議拘束もあるし賛成したんです。

そういうことがあって議長になるので、森さんから、イラクのことだけは頼みますよとわざわざ念押しがあったんです。僕も分かったような、分からないようなだったけど、議長としては、きちんと審議をして決まれば、よほどのことがない限りベルを押しすかないと思っていたので、ベルを押ししたら何かみんな安心したらしい。

○紅谷 イラクの承認案件というのは、議長に就任された翌年の最初の通常会冒頭で、イラク派遣の予算が入った補正予算と一括的な扱いで、与野党が初めて対決する、河野議長の出番となった案件でした。

○河野 そうでした。

それで、僕はベルを押ししたけれども、ドビルパンというフランスの外務大臣が、核兵器がイラクにあるかどうかと調査すべきだと言って国連で頑張るんです。その後、ドビルパン大臣が日本へ来たので話をしたんだけど、話をしてみても、こういうときは日本ももっと頑張るべきだったなと後で思ったんです。

だけれども、やはり手続に瑕疵がなければ、議長はベルを押しさざるを得ないですね。

○紅谷 イラク特別委員会では、小泉総理が答弁を撤回する、防衛庁長官も随分答弁を変更したりしましたが、野党が抵抗する中で採決されました。野党は採決は無効だと主張し、民主党の野田佳彦国対委員長が議長のところに来られ、議長はすんなりベルを押しすというわけにはいきませんでした。現場の委員長から経過を聞き、議運でも本会議の開会を決めたので、議長だけがノーと言うわけにいかない状況でした。

○河野 そうでしたね。個人的には慎重だったけれど、国会審議でもっと何か真相を知る

手がかりでも見つければともかく、それが欲しかったけれど何もなかったからね。

僕は、自民党の中川秀直国対委員長と民主党の野田国対委員長を呼んで、中川さんには何とか譲歩できないのかという話をして、中川さんは予算委員会でも補充質疑をするという譲歩案を提示したけど、当時の民主党は、菅代表、岡田幹事長で、野田さんは理解を示したけど、自分には権限が与えられていないからと、合意できなかった。

補充質疑というのは自民党にしてみれば譲歩なんだろうけど、本会議との間に行うならまだしも結論が出た後の質疑だから、岡田君は堅い人だから了解はできなかったと思うよ。

○紅谷 河野先生は、議長就任に当たって、与党だけの採決は極力避けたいという思いがあったと思います。ですから、いきなり全野党欠席での本会議のベルを押すに当たっては、非常に躊躇されただろうと思います。

○河野 それはすごく躊躇しましたね。何とか野党も入ってほしいと思った。

○紅谷 最終的に、本会議は、当日はらずらして翌日の零時半に開きました。野党は最終提案を持ち帰ったまま返事はなく、本会議は欠席でした。

これは、その後もそういう傾向がありましたけれども、数では絶対になわなので、河野議長に助けを求めただけ求めて、叶わなければ、国会の中ではなくて外で街頭演説をして反対をアピールする姿勢が顕著でした。

○河野 そうそう、いつもそうだったね。議長に呼ばれて議長室で協議しているのに、幹部は外で自分たちは反対したんだという演説をしていたよね。

昔の社会党の国会対策というのはいろいろなテクニクがあった、いろいろなことをやったけど、そういうものがなくなっちゃったね。

いい悪いは別として、けんかをするふりをしながらでも、最後まで話合いは続けていたから、自民党も社会党が粘っていると付き合っていたんですよ。だけれども、僕が議長の時自民党もそういう態度じゃなくなっていましたね。やはり、竹下さんなんか国会対策に関わっていた頃は、社会党とは随分いろいろと知恵を出し合っていて、最後は思い切って社会党の要求を取り入れたりしていたからね。

○紅谷 その当時は与党が十のうち十を取るのではなく、二とか三ぐらいの糊代があったと思います。

○河野 そうです。

○吉野〔衆議院事務局〕 本会議での承認案の採決で、自民党の中で、亀井静香先生が欠席され、加藤紘一先生や古賀誠先生が退席されました。反対のような意見表明をされ、造反と言われている行動についてどのように感じられたのか、それから、野党が欠席をすることについて、御感想をお聞かせいただければと思います。

○河野 自民党の中にいろいろな意見があったということは、ある意味で救いでもあったんです。できれば亀井さんたちが、自民党の中で例えば総務会とか政務調査会とかでもっと正面切って党内で論争してほしかったと思いますね。そういうことがなくて、最後のところで欠席や退席というのは、結果を動かすことにはならないわけで、ちよつと残念ではありました。でも、何にもなく総員賛成ということではなくて、多数の中にも様々な意見があるということが見えたのはむしろ救いの一つですよ。

それから、野党が欠席をするというのは、これをやったら国会としては成り立たなくなるから、やはり最後まで議論をして、粛々と反対するというのが正しい姿勢なんだと思いますね。

抵抗する方法は、長い演説をして時間を引き延ばすとか、最後は牛歩戦術なんというのがあったり、いろいろな方法はあるけれども、欠席というのは、抵抗手段としては職場放棄だから、上等なもので

はないですよ。

○紅谷 野党の抵抗の手段という話がありましたけれども、実は、自民党は野党の欠席を批判してきていましたが、自民党が最初に野党になった河野総裁時代も、随分欠席がありました。

ですから、やはり野党になったら自民党も欠席するんだなど、ちよつと驚いたのですけれども、完全には否定できないのかなと思いましたが。

○河野 言われるとおり、野党の立場というのは本当に難しく、僕はいまだに納得していないのだけど、野党は提案型の野党でなくや駄目だ、反対のための反対ばかりする野党は駄目で、提案しなきゃ駄目だと言うけれども、本当はそんなことはできないよね。

○紅谷 そうですね。議論する土俵に上っていくわけですからね。

○河野 そう。だから、僕は野党暮らしが長かったからだけど、野党というのは、とにかく批判して徹底的に批判して、悪いところをほじくり出すというのが野党の一つの仕事で、それ以上に幾ら提案したって絶対に数で負けちゃうんだから。

○紅谷 提案し議論するのはいいのですが、それは結論を出さなくてはいけないわけです。同じ土俵に上って議論していると、採決に応じないわけにいきませんから、野党としては本当にそれでいいんですかということですね。

○河野 そうです。それはできないから、僕は、野党時代は、とにかく反対しろ、反対して潰すのが仕事だと。出てきたものを全部潰し続けなきゃ自分の出番なんか絶対来ないんだから、提案して、それで向こうに呑まれたら自分の出番は全然なくなってしまうと思いましたが。

だから、野党の立場というのはなかなか難しい。きれいごとで野党の立場なんて説明しようと思ってもできないですよ。

《国會議員の互助年金に関する調査会》

○紅谷 平成十六年の通常会で年金改革法案が提出され、年金の議論が行われました。この過程で、国會議員の国民年金未納の事例が出てきて、議員だけでなく閣僚にまで広がって、福田官房長官が辞任し、追及していた民主党の菅代表の未納も発覚して代表を辞めるという事態になりました。

与野党を問わず国會議員が国民年金を納めていないということで、議員年金に対する批判が高まり、また、他の年金に比べると支給額が高かったため、批判的になりました。

○河野 僕が感じたのは二つあって、一つは、やはり議員の特権というものに対する批判があった。それは、議員が納めている額に比して国庫負担率が物すごく高いものだから、それは議員の特権じゃないかという批判が相当強かったということ。

もう一つは、民主党の若手議員が、もうべきではないということとを盛んに言い出したんだよね。それで、それがまた世論にも多少火をつけて、止めたらいよいよみたいな話になってきた。

ただ、若い議員は、もうの止めたらいよいよと言うけど、党の年配の議員は冗談じゃないとすごく怒っていたよね。年配の議員の中には、辞めたら職はないし一切の収入がなくなるので、額は別として年金をもらわないとやっていけないと言う。それはそのとおりで、年金を止めるというのはいかにも若手議員のスタンドプレーじゃないかと思つて、特権的なことはやるべきではないけれど、収めるところに収めないとまずいなと思つていたんです。

それから、議員の身分はとても不安定で、一回で落選する人もいれば三十年もやっている人もいて、どこが平均値か分からないところがあつてなかなか難しいなど。余り削減すると裁判を起こされると負けるという話もあつて、減らせばいいという無責任な言い方は

できないけど、何か結論を出さなきゃいけないだろうと僕は思っていたんです。

なかなか難しいのは、衆議院と参議院との違いで、参議院は六年の任期だから十二年、二十四年と行くけど、衆議院の方は、二年半か三年ぐらいで解散するから、安定した額というのは分からないわけです。

これは、現職の議員もそうだけど、辞めた議員で既に年金をもらっている人が相当数いて、そこにどこまで切り込むかというのがとても難しい問題だったんですね。

これを、衆議院、参議院それぞれでやるのは大変だから、国会として一体でやった方がいいんじゃないかと思って、衆参両院議長が相談をして議員年金問題に取り組もうということ、議長同士で話し合いをしたんです。それで、両院議長の下に専門家の調査会を作ったけれど、両院が一つの調査会を作るとするのは初めてのことでした。

○紅谷 お話があったように、議員年金の国庫負担の割合は、創設当初は二〇%から三〇%で、その後も五〇%ぐらいでしたが、平成に入ってから一気に増えて、最終的には七〇%を超える国庫負担率でしたので、非常に高かったという状況でした。

○河野 それは明らかに議員の特権だという批判を浴びることになるけど、この頃はいろんな事が取り上げられて、特権だという国民からの批判と、議員のポピュリズム的傾向も相俟って、それは、国会議員に対する国民の尊厳信頼が徐々になくなってきている、そういう時代背景があったんじゃないのかな。

○紅谷 議員年金の問題だけでなく、国会改革という名目でいろいろ議論されましたけれども、金目を削ることが国会の改革みたいな風潮で、議員宿舍の家賃が安いとか、議会雑費は不要だとか、速記者養成所が無駄だとか、そういう話を前面に出してきていたのが、

この時期でした。

○河野 議員特権の最たるものは、二つ目の給料と言われている文書通信交通滞在費なんだろうけど、それについては議員はみんな言わないんだよ。

最近、身を切る改革とか言っていて、そのためには議員の数を減らしてみたいなことを言ってるけど、僕はこれは違うと思うけれども、そういう方向に行くんだね。

議員の特権問題というのは確かにやらなければならぬことだから、民主党の若い議員が、互助年金を止めると声高に言うものだから、先輩議員に言わせれば、俺らは二十年も三十年も納め続けてきて今更止めると言われても困る。大して納めていないのが止めると自分だけいい格好されちゃ困るから、何とかしなきゃ駄目だよ。そのようなこともあったんですよ。

それで、調査会を作って、そこに委ねようということにしたんです。

○紅谷 国会議員に年金は必要ないとか、国会議員の特権というのはなくした方がいいという意見もあって、各党の国対委員長が議長の方で何とか取り扱っていたきたいという申し入れがあり、河野議長と参議院の倉田議長との間で、両院議長の下に第三者機関を設置しようということで「国会議員の互助年金に関する調査会」が設置されました。

メンバーの人選については、元人事院総裁の中島忠能さんを会長に選任されます。

○河野 内容からして人事院総裁が適当じゃないかと思ったから中島さんをお願いしたんだけど、すごく短期間で答申という相当無理な注文だったから、中島さんも、こんな短期間にこの問題をできませるかという話だったけれども、引き受けてくれて、それで何人か委員を探したんです。

○紅谷 一月に答申を出してもらいましたから、半年余りで十八回の会議をやっています。

先ほどお話がありましたように、議員のOBは年金をもらっていたので、議員の年金を遡及して減額すると、他の年金でもそれができると思われてしまうという問題がありました。

○河野 かつて農業者年金でそういうことがあったということで、裁判になったら勝てるかという話でしたね。

議員年金は、毎月歳費から十万ぐらいは差っ引いていたけど、ボーナスでは少なかったから、この調査会では、何とか国庫負担率が五〇%ぐらいになるように議員から徴収しなくちゃいけない。ですから、ボーナスのときもかなりの額を差し引くという内容にしたんですよね。

○紅谷 調査会の答申は、議員の納付額を今までも七十四%引上げて、百二十六万だったのを二百二十万にする。そして、給付は逆に三十%余り下げ、OBについては現行どおりという答申の内容でした。

答申を受けて、議会制度協議会で協議し、各党から異論はなく、淡々と手続きが進んでいくものと思われましたが、その後に状況が一変してしまいました。

○河野 自民党筆頭の鈴木恒夫君が官邸から呼び出されて、これは自民党の中川秀直政調会長とも打合せ済みで、議員年金の制度を廃止すると言われたと言っています。

衆参両院議長の下に置いた調査会の答申を、有無を言わず潰されたわけだから、議長としては本当にメンツがないわけですよ。

今にして思えば、あのとき議長がもっとごねればよかったかなと思うね。元々は各党の国対委員長からの申し入れを受けて出した答申なんだから、それを各党が受けけないというのならば、もう一度国対委員長を呼ぶべきだったよね。

○紅谷 自民党が、官邸の指示で、議員の特権を理由に廃止と言い出したので、他の党も答申でいいとは言えなくなっていて、結局は答申案は水泡に帰してしまいました。

官邸は議員年金そのものを廃止という意向でしたが、全て廃止というわけにいかないの、議員年金自体は平成十八年四月で全部廃止する。在職十年以上の議員については年金を支給し、現職は一五%、OBは一〇%カットするという内容で決着しました。

これで議員の年金は廃止になりましたが、本当に良かったのでしょうか。

○河野 少なくとも、史上初めて両院議長の下に調査会を作って、答申をもらって、それが官邸からの横やりで潰れたというのは、議長とすれば慙愧の至りで、あつてはならないことだという感想は残しておくべきだろうな。

あれから十五年ぐらいたって、当選五回、六回以下の議員は議員年金の存在自体を知らない人たちだけど、みんな議員の職責を果たすのに、何もなくてやっていけるのかなあ。

○紅谷 議員年金は、元々は国会法にあった退職金に代わる制度でした。議員には退職金がなく、それに代わるものとして議員年金という制度ができ上がったわけで、議員活動、政治活動をする上では、それなりの歳費やある程度の経済的な保障がないと、安心して議員活動ができないのではないのでしょうか。

○河野 答申案のどこかに、マックス・ウェーバーの「職業としての政治」というのを考えるとやはりこういうものはちゃんとおかないと駄目なのではないかと言っているよね。真つ当な議員のなり手がどんどんいなくなってしまうよね。

○紅谷 議員年金の廃止が決まってから幾らも経たない河野議長在任中に、議員年金の復活という話が出ていたのは、当時もお聞き及びだったかと思えます。

○河野 聞こえていました。今更何を言っているんだ。正直あきれたと同時に、自分がいる間は絶対許さぬという気持ちでした。余りにもひど過ぎたよね。

○岡山〔衆議院事務局〕 現在、国会で文書通信交通滞在費について議論が行われており、コロナ禍の中、政治不信を招かないためには、国民の理解を得られるような制度を目指した議論を行うことは重要だと思うんですけども、一方で、議員に対する経費そのものに問題があるんじゃないかというような議論は、互助年金改廃の際にもあったのではないかと思います。

議員の活動に対する適切な報酬の在り方について、先ほどもポピュリズムという言葉も出ましたけれども、いかに国民の理解を得るべきかについて、お考えをお聞かせいただければと思います。

○河野 それは大変難しい話だけれども、まず、最近の話を聞いていて、当選後一日勤めて文通費が百万円はひどいじゃないかという指摘は当然だけれども、文通費そのものがおかしいなら、領収書、支出明細もちゃんとつけろという話をしているようですが、僕に言わせれば、そんな話をするのなら、本来の報酬のほかに百万円を毎月もらっていて、それについては非課税だというこの仕組みの方が議員特権じゃないかと思わないのが不思議だと思います。確かに議員特権というのはあると思うけれども、それもこれも本質的に言えば、議員が期待される仕事をちゃんとやっているかどうかですよ。国民の議員に対する期待というものがあって、その期待に応えていけば、ある程度の特権は容認されるんです。また、そうされてきていたんですよ。ところが、余りにも期待を裏切って全然違うことが次々に起こると、やっぱり特権なんか絶対認めないという世論が出てくるんですね。今はそういう状況ですよ。

もちろん、今の問題については、しかるべく処理すべきだと思います。そういう議論をしながら、その一方で、議員が世論の期待に

応える議員活動ができていくかどうかということを反省して、その期待に応えるための制度を考えていかなければならないと思います。

《小泉総理への申入れ》

○紅谷 小泉総理は、平成十三年の自民党総裁選で、終戦記念日には必ず靖国に参拝すると公約されて当選し、総理在任中は時期は違いうにせよ毎年参拝されました。

小泉総理としては公約を履行しただけということかと思いますが、靖国参拝については長年の歴史があり、特に靖国参拝が問題になった中曾根総理以降は、後藤田官房長官の発言もあって自粛したという経緯がありました。

河野議長は、小泉総理の靖国参拝について懸念を抱かれて行動を起こされましたが、歴史的な経緯も含めてお話しいただければと思います。

○河野 後藤田官房長官が、靖国参拝についていろいろ調べて、中曾根総理は行くべきでないという結論を総理に直言し、総理も受け入れて、それ以来行かないということにした。以来、自民党の歴代総理・総裁は行かないこととしたわけです。

経緯はいろいろあって、日中国交正常化交渉のときに、日本と中国との関係は、戦争をした指導者が悪くて国民は悪いわけじゃないということになって、それで、その指導者が祭られている靖国神社に、総理大臣が参拝するのは理論的にも説明がつかないんじゃないかという話です。それで、もう行かないということから始まった。

小泉さんが自民党の総裁選に出てきたとき、僕は横で見ましたよ。総裁選の演説で、私は当選したら必ず靖国に行くと言ったら、隣に橋本龍太郎さんがいて二人でそれを聞いていた。橋本さんも立候補していて、次に彼が挨拶するんだけど、いっぺんに不機嫌にな

って、ばかなことを言うもんだ、もし彼が当選してそんなことをしたら国際的に大変なことになるから、絶対あんなことを言っちゃいけないと言っていました。橋本さんは遺族会の会長だったから靖国に行ってもおかしくないけれど、彼は絶対行かないと言っていた。そうしたら小泉君が行くと言うものだから、遺族会会長の橋本君は立場がないわけで、とても怒っていた。

小泉さんがそれを最初に言ったのは総裁選に出馬した時で、その時は橋本君が当選するんですが、その次のときにも言って当選し、それで選挙の公約だから行くというわけです。

小泉さんはいろいろな理屈を言いながら行っていたんです。自分は靖国で平和を祈っていると言うけれど、僕が一番気になったのは、外国の新聞、最初にニューヨーク・タイムズが書き、それからヨーロッパの新聞も、日本の戦前回帰の風潮が日本を覆っているというようなことを書き始めていたんです。

中国、韓国の新聞が書くなら分かるけど、欧米の新聞までそんなことを書くと、これは本当に国際的に日本が誤解されてしまう。僕はそれはまずい、これを止めなきゃいけないと思っただけです。

○紅谷 小泉総理は、平成十六年一月に靖国神社を三年連続で公式参拝しました。五月に来日した中国の呉儀副首相は、小泉総理との会談をキャンセルして、日中関係が懸念される事態となりました。

○河野 僕は宮沢さんのところへ行って今の事態を話したら、宮沢さんが、そうだね、余りいいことじゃないなという話になって、それじゃ私がやってみましょうと。議長という立場ではあつたけれども、歴代総理に一人ずつ随分丁寧に話したんです。中曽根さんの事務所へ行ったり、細川さん、羽田さんにも話をし、それから橋本さん、森さん、村山さん、みんなに話をした。

それで、個別に話をしたら一遍集まって話をした方がいいだろうとなつて、どこで集まるか、憲政記念館がいいかどこがいいかとな

って、議長公邸に呼んだんだけれども、中曽根さんは、元総理を議長が公邸に呼びつけるなんていうのは失敬だ、行かないと怒った。よく分からない話だと思つたけど、あなたがおかしいと言つたということは皆さんに私から御披露しますと言うと、それはもう全部おまえに任せると言うから、分かりましたと。それから、細川さんも行けないけれど、河野さんの言うとおりでと思うから任せますと。結局、来たのは宮沢、橋本、森、海部、村山の五人でした。

そこでの結論は、とにかく小泉さんには慎重にやってもらいたいと伝えることになつたんです。僕は本当は行くなと伝えたいと思つただけでも。

それで、その申し入れの場所やタイミングを考慮して、小泉さんが院内に入る時に院内総裁室で行うことにして、森さんに同行してもらふことにしたんです。

小泉さんは、私の顔を見て、河野さん分かつてる分かつてる話に分かつていると言う。そうは言うけれど話を聞きなさいよと言つて話してきたけど、彼はそれでも靖国に参拝したんだよね。

○紅谷 議長の行動としては、いろいろ意見があるだろうというのにはあつたかと思いますが、躊躇はなかつたのでしょうか。

○河野 それは多少考えました。しかし、議長として、国権の最高機関である立法院の長として、行政府のトップに対して注意をするということはあつてもいいんじゃないかと思つたね。

○紅谷 小泉総理の参拝については、自民党の中からもほとんど声が出ず、国会でも取り上げられることは余りなかつたという状況だったかと思ひます。

本当は国会の中で、外務委員会なり内閣委員会なりで、そういう議論がなくてはいけなかつたのでしようが余り議論されず、そういう中で議長が出られるというのは、まあ、形としてはあるんだろうなど。現場の委員会ですら議論がないから、議長として意見を

述べるというのがですね。

○河野 あれは僕だからやったので、ほかの議長ならやらなかっただろうね。

言った後に、当時の自民党幹事長代理だった安倍さんが記者会見で、衆議院議長がこんなことをして何だみたいなことを言うんですよ。それに対して後藤田さんが、何を言っているんだ、安倍幹事長代理の発言はおかしい、国権の最高機関の代表が大事なときに動くのは当然だと言ってくれたんです。

○紅谷 歴代総理がほぼ同調される形でこういう形になったわけですから、その後、自民党三役の与謝野政調会長や久間総務会長、古賀元幹事長も河野さんと同意見だと表明されました。最近、読売の渡邊恒雄主筆の特集がテレビであったのですが、渡邊さんも小泉さんの靖国参拝については猛烈に批判していました。

○河野 そうそう、渡邊さんは、靖国問題は僕と意見が近かったんだよね。

そういう多くの反対意見があったけれども、小泉という人はちょっと変わっていて靖国参拝は続くんですね。けれども、議長としては、それが限界でした。

《郵政民営化法案衆議院可決・参議院否決、郵政解散》

○紅谷 小泉内閣が政権の柱としていた郵政民営化法案は、衆議院で可決されましたが、参議院では否決され、それを理由に衆議院が解散されました。河野議長としてはじくじたる思いで解散詔書を読み上げられたのではないかと思います。

そもそも、小泉総理は、宮沢内閣の郵政大臣のときも同じような持論の発言があり、与野党含めて大臣はけしからぬということと委員会は止まって、河野官房長官が呼ばれたということがありました。

○河野 当時の通信委員会が、小泉大臣には出席を要求しないとなり、代わりに呼ばれて行きましたよ。委員会でお詫びすると同時に、何とか審議を進めてくださいというお願いをしました。

委員長は亀井久興さんで旧知の仲だったから、官房長官が現場の委員会に出るといふのは異例でしたが、自民党も含めて小泉大臣に総反発し、法案の審議を一切しないということでしたから、特に出席したということでした。

○紅谷 そういう経緯がありました。二〇〇三年の自民党総裁選では小泉さんは圧勝しました。

○河野 そうでした。

郵政民営化法は参議院で否決されて衆議院が解散されましたが、あのときの小泉さんというのは、何か付き物が付いたみたいな勢いでやったんですね。やってはいけないことを二度も三度も繰り返しやっていたわけです。例えば、自民党の総務会の全会一致を突っ切って多数決でいいと言ったとか、関門があったものを全部突っ切ってやるんだから、まあ、信念というか執念というのか。

○紅谷 小泉総理がいろいろ突っ切っていくというのは、議員年金のときにも、小泉さんは何か取りつかれたように一気に進んでいったというお話がありました。

とはいえ、小泉さんは持論を述べた上で総裁選で圧勝して総理に就任し、郵政民営化法案を提出しました。当時、河野議長は、郵政民営化法案は与野党の中でも反対がありましたので、提出されたときはどう思っていましたか。

○河野 それは、相当無理な提案だから、行くところまで行って、一国会は審議未了で終わるんじゃないかと思っていました。

審議未了で終わるにしても、これにかける政治的なエネルギーをかけ過ぎていて、これをやるからほかは何もやらないのでは駄目じゃないかと思っていましたよ。

これは後の話になるけれども、議員年金の問題も、本当に後出しじゃんけんみたいなもので、でき上がったところに突然出て来て、がらつと変えちゃうんだから、とにかく無理を承知で突っ込んでいくから、みんな強引で無理な手法でできているわけです。さっき言った総務会もそうだし、法案に反対だからと委員を差し替えるとか、ちよつとあからさまで、これで党はもつのかなという気がしていました。

あのときは武部幹事長で、総裁の御一存で何でも総裁の言うとおりにやるから、党が内閣をチェックする、政治をチェックするという機能は全くなく、小泉さんのやることをサポートするのが自分の役目だと言ってやっているから、どうにも止まらないわけです。野党も全く非力ですからね。

だから、僕は一国会は審議未了だろうと思っていたけど、行くところまで行ってしまったので、本当にびっくりしましたね。

○紅谷 お話があった自民党の総務会では、数でいうと七対五の賛否で、あとは棄権でした。総務が三十人いて七人の賛成で決定するという結果でした。

○河野 それは、中曽根内閣のときと同じぐらいに国会軽視というか、党や国会よりも自分たちで選んだ専門家の方が権威があるから、党や国会が何と言おうが審議会がこう言っているんだからという感じで、軽視しているという状況でした。

○小田〔衆議院事務局〕 審議入り前から民主、社民両党の徹底抗戦を受けて混乱しました。

特別委員会設置の本会議前には、議場に入る河野議長を民主党の議員五十人ぐらいが取り囲んで抗議する場面があり、民主、社民両党は、全ての委員会の審議を拒否して、特別委員会の委員名簿の提出を拒否しました。

両党には、野党に配慮した議長采配を期待する思惑もあったよう

ですけれども、河野議長は、野党に対して名簿の提出を再三要請されました。野党の審議拒否戦術というのは時に批判を浴びると思えますが、郵政民営化法案の審議入り当時の心境をお聞かせいただければと思います。

○河野 この法案は相当無理な法案だと思っていました。無理な法案というのは、急に提案してもなかなか通らないだろうから、よほど丁寧にはやらないといけないという気持ちがあったんです。

しかし、総理の強い指示が出て自民党の執行部が押しまくるわけです。私は、これは最終的には進めざるを得ないけれども、野党が駄目だと言っている気持ちもよく分かるから、慎重にやらなくてはいけないと思っていました。

そう思っていたけれども、特別委員会の委員の名簿を民主と社民だけが出さないから委員会の構成もできないので、順を踏んで進めざるを得ないんじゃないかという話を最終的にはしましたね。

○紅谷 特別委員会は、自民、公明、共産で、委員長、理事を決め、提案理由も聞く、質疑も行うということで、どんどん進んでいきましたから、これ以上の混乱を避け、与党の先行を押しさえようという河野議長の説得で、最初の指名から一週間後に名簿を出してきて、再スタートしました。

○河野 小泉さんは、とにかく国民世論は自分についているという自負というか思いがあつて、国会の中を全部敵に回しても世論は味方だという、周りから見ているとちよつとおかしいんじゃないかというぐらい、確信犯というか自信満々でやっていたんですね。

○紅谷 あの頃、私はいろいろな行事に河野議長にお供し、小泉総理と一緒に場面が随分ありました。例えば駅に小泉総理が現れると、芸能人が来たかのように、きゃあという歓声に溢れていて、私は不思議な光景だなあと思っていました。

○河野 小泉さんはそれまで自民党の中ではずっと少数派で、多数

派だったことは余りないと思うんです。だから、自分の主張を世論にアピールしていたんだよね。

○紅谷 紆余曲折があった委員会での審議でしたが採決が行われ、いよいよ本会議となって、議長が開会のベルを押されたのですが、始まってからは討論があり、記名採決でしたから随分時間がありました。

そのときの本会議場の雰囲気、議長席からどのように見ていらしたのでしょうか。

○河野 もうそれは、一人一人の思いがみんなばらばらな感じで、執行部がまとめているという感じは全然ないんです。みんな自分の選挙があるから、当選できるかという心配の方が大きくて、法案がどうかということは関係ないような表情、雰囲気ですよ。

○紅谷 なかなか票読みがしづらい状況で本会議に入っていきましたから、議場の中では、当時の安倍幹事長代理が、一番前に座っている反対派議員を呼び出して、議場の後ろで説得していました。

○河野 そうそう。例えば城内君は議長席のすぐ前に座っていたのを連れていって、本会議場の後ろの壁のところにいるいろいろやつたけれども、どうもうまくいかなかったようで、安倍さんは慚然として帰っていったよね。

○紅谷 採決の結果は、自民党からは造反や棄権が多数出たものの、五票差の僅差で可決しました。

ですから、可否同数になって議長決裁ということも考えられていました。事前には可能性の問題としてお話ししましたが、もし可否同数になった場合、賛成なのか反対なのか、どうお考えだったのでしょうか。

○河野 初めから言われていましたね。それまでも、可否同数の場合には議長の決裁は原則は否決だということで、それは、否決するだけのエネルギーが同数まで高まっているということ、仕切り直

しでいいんじゃないかという話がある、過去、そういうふうに言われてきていることは承知していました。

私も、これを見ていて、否決しようというエネルギーがこれだけ多いとなると、同数で可決と言ったらこれはもう責任は全て議長が背負うことになる、もちろんそれはそれでいいけれども、それでいいだろうかという気持ちがあつて、まあ、同数になってみなければ分からないけれども、やはり否決した方がいいだろうなという思いの方が、正直言ってあのときは強かったですね。

○紅谷 確かに、可否同数のときは、現状を変えることなく継続して議論していくんだ、そのためには否決というのが先例と変わってきました。当時唯一、議長決裁で可決したのが、参議院での河野謙三議長の政治資金規正法の例でした。

○河野 あの時は本当にみんなびっくりしたね。びっくりしたけれども、あのときの謙三議長の言い分は、選挙制度の改革と政治資金規正法とが二本一緒に出ている、片っ方を通した以上は片っ方も通さないと整合性が取れない。だから可とすると言ったということでした。

その時は、芦ノ湖に浮かぶ双胴船が頭に浮かんで、両輪が回らないと前へ進まないから、敢えて可と言ったんだと言っていました。

○紅谷 河野謙三先生は、随分後からですが、可否同数の場合は本来は否とするのが正しいと思うけれども、あの状況では、選挙法と政治資金規正法とが一体だったので可とするしかなかったと述べておられました。

可否同数については、河野議長時代には、臓器移植法でも可能性がありました。

○河野 そうでしたよね。あれは党議拘束を外していたから本当に事前に読めなかったよね。この臓器移植法は、A案、B案、C案、D案の四案あつたけれど

も、結果はA案が圧倒的に賛成が多かったから同数まで行かず済んだ。

しかも、あれは最初に可決したから、他の案は採決しなかったんだよね。

○紅谷 あれは採決順序をどうするかというのがあって、他の案を否定しないために、議長は可決するであろうA案をまず議題にし、結果が出たので、以後は一事不再議で他の案を議題にする必要がないという進め方をされたということでした。

○河野 そこは本当に書き残した方がいいところですね。

○亀屋〔衆議院事務局〕 採決に際しては、自民党内で反対や棄権をした議員がいらっしやいました。政治信条を貫けば、公認を得られない可能性もある中で、信念を貫いた行動を取った議員に対して、河野先生はどう思っていますか。

○河野 議員は政治信条を一人一人持っていますから、それを貫こうと努力するのは評価します。評価するけれども、基本的にはやはり政党人として党内でまず議論をして、賛否について十分な議論をする。そして、最終的に党議が決定をすれば、それに従うというのが党人としての生き方ですから、どうしてもそれに従えないなら離党する以外にないですね。

また、党の執行部も、所属の議員をそこまで追い詰めていいかということがありますね。ここまで行ったら、党としてもこういうふうにしてやろうという思いが執行部の中にないと、党としてうまくいかないし、若い党員が育たないと思います。

僕は党を離れた経験がありますけど、離れたら大変な不利益を被ることは分かっているんで、それを承知の上でどこまで頑張るのか。利益にぶら下がりながら、自分の嫌なところだけは嫌だと言って反対するのでは通らないと思います。

○紅谷 郵政民営化法案の採決は、衆議院では僅差でしたから、小

泉総理は、法案が参議院に送られた翌日には、参議院で否決された場合は直ちに衆議院を解散して、選挙を行って民意を問うと発言されました。

当時の新聞は、やはり参議院の自民党議員に対する脅しの発言だという記事があって、必ずしも真意が計り知れないところがありました。

○河野 そうなんだけれども、幾らそう言ったって、本来は参議院は解散があるわけじゃないから余り脅しにはならないんだ。

○紅谷 逆に反発も強かったようで、参議院の採決では、自民党から造反が随分出て、百人対百二十五の大差で否決という結果になりました。

○河野 小泉さんが何といっても、否決される可能性はかなりあって、どっちも確信が持てなかったんだよね。

小泉さんは、もしかしたら二、三票差で勝てるかもしれないというふうに思っていたし、参議院の村上さんたちは絶対に否決できると思っていた。

結局、社会党が崩れたんだけど、自民党からも反対が随分出たんですね。

○紅谷 解散当日は、参議院で郵政法案が否決された後、内閣は直ちに解散の手続きに進むのですが、反対する大臣がいたために、本会議は否決から七時間後でした。

本会議の開会宣告後、議長席後ろの扉が開いて、細田官房長官が解散詔書を持参し、河野議長は解散詔書を読み上げられるのですが、そのときはどういってお気持ちだったのでしょうか。

○河野 議長とすれば、本来こういうことを総理の思うままにさせてはいけないという気持ちはあったけれども、どうしようもないんだね。陛下の国事行為だから止めるわけにいかない。

僕の気持ちと同様に、万歳も気の抜けた万歳だったよね。

○紅谷 小泉総理は周りの反対を押し切って解散されましたが、それまでは、本当に解散するかどうかというのは、参議院で否決されても、まだ疑心暗鬼でした。

自民党では、衆議院解散が決まった後も、反対議員を公認するのか、その後任をどうするのか等で大混乱でした。議長としては、参議院で法案が否決されたから衆議院を解散するという小泉総理の判断は、当時、憲法上もおかしいという意見が随分ありましたが、どう思っていましたでしょうか。

○河野 それは全然筋が通らないと思いましたね。もちろん憲法上もおかしいと思っただし、政治的に見ても参議院で通らないのを衆議院で解散したって、衆議院で勝っても参議院は同じ状況なわけだから、それはおかしいなと思っていました。解散しなくても、衆議院から出直して話がつけば、次の国会で参議院は絶対通っただろうと思っただけでもね。

○紅谷 そもそも、参議院での否決を理由に衆議院を解散することができなのか。しかも、衆議院は法案を可決しているわけですから、内閣と衆議院の意思は一致しているわけですね。

○河野 それはあり得ないことで、だから学者にも随分批判的な意見がありましたよ。

参議院で否決されたから衆議院を解散するというのは、どう考えても理不尽でおかしいと思っていました。さらに、解散についての保利元議長の保利書簡があったし、解散は、民主主義において国民から選ばれた議員の任期を残して職を解くということで、そんなに簡単にしている事柄じゃない。

憲法上の問題は、確かに六十九条解散と七条解散の二つのケースがあるというけれど、六十九条は、内閣不信任案が可決した場合に、総理に解散か総辞職かの選択肢があつて、解散は総理大臣として最後のカードだから分かりますよ。

これだって本当は不信任案が可決されれば辞めるのが当たり前で、解散するというのはどうかなと思うけれども、もう一方の七条解散というのは何だと。よく分からないですよ。

つまり、七条解散というのは、保利さんも言っておられるように、例えば立法府と行政府が対立してにっちもさっちもいなくなつたときは七条解散ということがあるのだけれども、あのような自民党一強状況でそういうことはないわけですよ。

もう一つの場合は、何か新しい問題が出てきて国民に信を問うための解散というけれど、新たな政策があれば国会で議論することが最優先ですよ。

だから、小泉総理の解散は恣意的と言ってはちよつと言葉が過ぎるかもしれないけれど、自分の主張を通したいという解散でしかない。だからこれはおかしいと僕は思いましたね。しかし、それを止める方法がないのですよ。

世界各国の例を見ても、今はもう総理が解散権を持つて解散するなんていうのは、日本が先進国では唯一の例外的な国と言っている。イギリスが解散権を制約する方向に進んでいて、今年になってEU離脱問題で国民の信を問えないということで、元に戻ったりはしているようだけど、日本はほとんどは七条解散ですよ。

○紅谷 今の政府見解は、六十九条解散以外にないのかについては、内閣の権能として解散権はあり、制約がないのかというと、制約がないという見解なんですよ。でも、濫用すべきではないと歴代の総理は言っている、という言い方です。

河野議長がおっしゃるように、郵政解散は、衆議院は郵政法案には賛成したのに、参議院が否決したから衆議院を解散するのか。それは衆議院議員の首を切るわけですから、それが許されるのか。選挙をやった後に、もう一度郵政法案を出して、参議院で否決されたら、また衆議院を解散するのかわからないことにもなりかねません。

○河野 そうなんです。あれで問題が解決するんじゃないものね。だから、どう考えてもおかしいと思ったが止めるすべはないんだ。だから、行政府のトップに解散権を委ねていて、立法院が何にもそれに對して對抗措置がない。立法院だって何か對抗措置があってもよさそうなものだけれども、それはない。

宮沢元総理は、解散権というのは好き勝手に振り回しちゃいけない。あれは存在するけれども使わないことに意味がある権限で、めったなことに使っちゃいけないと言っておられましたね。

○紅谷 歴代の内閣は、解散権は制約的に行使していたと思うのですが、郵政解散以降のいわゆる「アベノミクス解散」は、消費税10%を予定どおり行うかどうかについて国民に信を問うという理由ですが、法案の附則に書いてある内容ですから、何で解散をする必要があるのか非常に疑問だと言われました。

その後の「国難突破解散」と言われるのも、理由が不明確と言われていました。

○河野 それはそのとおりでと思う。宮沢さんがいたら、絶対に解散権の濫用だと言ったと思う。本当におかしい。

国民が選んだ議員を総理が切るとするのは悪手ですね。本当に、好き勝手に振り回しちゃいけないと思います。

宮沢さんという人は、権力の濫用というのが一番良くない、権力者は本当に権力を使うことを恐れなきやいかぬ、いつも権力者は薄氷を踏む思いでやりなさいと言っていました。この人が一番そういうのには慎重な人でした。それ以前の人も、言わないだけでみんなそういうふうには律していたんですよ。

乱暴だったのは、中曽根さんと小泉さん以後だね。小泉さん以後は、乱暴というより、党が権力者に唯々諾々だから、やりたいようにやっちゃう感じだよ。

以前は、前尾さんとか保利さんとか灘尾さんとか、後藤田さんな

んかもそうだけれども、おかしいと言う人がいたんだけど、最近はそのような人がいなくなったから、ちよつと危ないと感じますね。

○紅谷 郵政解散の選挙では、与党で全議員の三分の二以上の圧勝という結果でした。

次の国会でもう一度郵政法案が出されましたが、反対した人たちが、衆議院も参議院も含めて賛成に回り、結局は、解散も含めた小泉総理の論理が正しかったような結果になってしまいました。

ですから、解散が憲法上どうなのかという議論は、ほとんどされなくなりました。

○河野 選挙の結果が全てという話で、参議院議員の意思もそれによつて変わったということになってしまったということでした。

○紅谷 河野先生が引退されてからですが、どこかの対談で、解散権が国会を揺さぶる武器になったとおっしゃっていました。

○河野 言いましたね。事実、野党が脅かされて揺さぶられるんだものね。

意図的に幹事長が物を言つて、それなら解散もあるみたいなことを言つとすぐ引つ込んじやう、あれでは駄目ですよ。

僕は、野党時代に一番勢いのある頃は、選挙のたびに数は増えるものと思つていたから、自分たちの主張を大声で言えるのは選挙しかない、野党にとつて選挙ほどいいものはないなんて偉そうなことを言つていたんですよ。けれども、困ったことは、選挙のたびにお金がかかつて、財政的に政党が立ち行かなくなつちやうだよ。

僕らのときは、十人ぐらいの政党が、二十五人候補者を立てないと政党要件がないと言われるので、無理して立てるわけです。かかしてもいいから立てると言われるけれど、供託金が三百万ずつ要るから、戻つてくればいいけど、僕らは半分ぐらいが没収されちゃうんだよ。

だから、途中からは、やはり選挙は怖かったですよ。選挙のたび

にぞつとした。だから、選挙というのは脅しの道具になるんですよ。新自由クラブは十年やったけれど、選挙を十回以上やったんですよ。衆議院をやり、参議院をやり、統一地方選挙をやりと、毎年やっていたから、僕はもう、東京にあった家も何も全部なくなりましたよ。

○紅谷 今お話がありましたけれども、先国会の内閣不信任決議案の提出に際し、与党の幹事長が、内閣不信任案の提出が解散の大義になるという発言をしたところ、それに対して、ある野党の幹事長が、選挙の準備ができていない中での提出には賛成しかねるといふ発言で、脅しが効いていると感じましたね。

○河野 幾らそういったって、筋が違うよね。野党の幹事長から、そんな発言があるというのは情けないかぎりだね。小泉郵政解散の影響がいまだにあるというのは残念ですね。

《クールビズの申合せ、議長挨拶》

○紅谷 互助年金や郵政解散の他にも、議長時代の記憶として残っているのではないかと思われるのが、クールビズの申合せや戦後六十年決議、更には式典等での議長の挨拶ではないかと思えます。クールビズの申合せは、本会議場も含めて上着は要らないという話が議運で進んでいました。

○河野 議運が、本会議もクールビズでいいんじゃないかと言ってきたんですよ。僕が、本会議には絶対上着が要ると一人で頑張ったね。やはり国会の品位、まあ、上着を着ているのが品位かどうか分からないけれど、余りカジュアルな格好で本会議場に來られちゃ困ると思っただけです。

環境大臣だった小池百合子さんが、クールビズに協力してくれと言ってきたけど、国会のことは国会で決めると言っただけで断りました。

みんなクールビズでやりたきややったらいいけど、私が主宰する本会議だけはきちんと背広で出てきてもらいたい。これは国会の品位を維持するためにはどうしても必要なんだと。暑いとかなんと言っていたけど、それは国会の空調の温度を何度にするかという議論であって必ずしも関係ないと言っただけで断ったと思うな。競馬の馬主やラグビーの監督なんかでも上着を着ていますよ。フォーマルのときには上着が必要なんですよ。

○紅谷 議会は国の最終的な意思決定の場ですから、そこはフォーマルでというのは当然ですね。

○河野 僕もそう言っただけです。

国会の委員会でも、やたらに派手な上着、ハワイにでも行っているみたいな上着を着て、カラーのシャツを着て出席している人がいました。当選回数が多い人が綿パンを履いてきていたりしていたからね。

○紅谷 国会の衛視が、議員にそれはおかしいですよとはなかなか言えませんか。

○河野 それは言えないでしょう。そこは議運の理事あたりが綿パンはおかしいんじゃないかと言わなくちゃね。本当ならドレスコードというのがなきゃいけないと思うけれどもね。

○紅谷 国会法十九条に議長の職務権限が書かれていて、議院の秩序保持権、議事整理権、もう一つが、議院を代表する議院の代表権です。

議院を代表するというのは、議長としていろいろな行事に出たり挨拶をしたりすること、院の代表であり、議長の権限に基づいていますから、議長の挨拶の内容も含めてそういうことです。

議長が挨拶する多くの行事があり、そこでの挨拶文は、基本的に事務局の方で案を用意して議長に手を入れていただくのですが、全国戦没者追悼式や沖繩の全戦没者追悼式での挨拶文については、元の原文が跡形もなくなっていて、むなしさを感じたという思い出が残

っています。

中でも、全国戦没者追悼式の挨拶で、河野議長は、海外での武力行使を自ら禁じた日本国憲法に象徴される新しいレジームを選択するという挨拶をされて、当時の安倍総理の戦後レジームからの脱却という、保守色の強い路線を牽制されたような挨拶をされました。

そこは、当然ながら議長のお考えがあつたことだつたと思いますが、如何だつたのでしょうか。

○河野 意図的でしたよ。二つあつて、一つは、今の憲法は変えた方がいいという安倍さんを始めとする人達の主張は、議長として絶対受け入れられない。今の国会は現行憲法に基づいて開かれていて、議会で、議長は護憲の姿勢をとることは当然でしょう。議長が、自ら憲法を変えた方がいいとは絶対言うべきでないという一貫した気持ちに私にはあつたので、安倍さんがそれらしいことを言えば言うほど、こつちはそうでないことを意図的に言ってきたという、それが一つです。

それから、もう一つは戦争ですね。

僕の政治家としての一貫した理念は、国が戦争をしないことが政治家の仕事だと思つているから、戦争の問題について議題になると、やはりそこだけはどうしても主張が跳ね上がるんです。戦争はすべきでないというのは憲法の理念に従っているわけで、それは議長としての務めじゃないかと僕は思つているんです。

憲法の理念を守る、あるいは生かすことは大事なことでと思つて、改憲に対する護憲論、右傾化に抵抗する主張というのは、やや意図的に言つたので、それは、国会を代表する意見としてどうかとなる問題があるかもしれないけれども、議会というのは、憲法の理念を生かすということが務めだという意味からいえば、外れてはいないと思つていたんです。

○紅谷 それは議会だけでなく、本来は内閣自体に憲法遵守義務

がありますからね。

○河野 いつも言うように政治力学というのがあつて、内閣が中心から離れて右へ右へと寄れば、もう片方は左へ左へと寄らないとバランスは取れないんですよ。権力が右へ寄つたときに、その権力を正すべき国会が生半可なことをしていたら、一緒になつて右へ曲がつていくわけで、権力が右に寄つたら、チェック機能は左へ寄つてバランスを取らなきゃいけない。これが真ん中に寄れば、こつちも真ん中に寄つたらいい。この政治力学上のバランスというのがあると僕は思つているんです。

だから、何となく、何となくというのは無責任な言い方だけれども、政権が右へ右へと向いていけば、やはり、それはどこかでそうでない力が働いてバランスを取らないと非常に危ないという気持ちがあつて、だから、総理と一緒にの沖繩の追悼式とか武道館の戦没者追悼式とかの挨拶が一番激しいよね。一人で行つているときにはそんなに強くは言つていないと思うけど、小泉さんとか安倍さんと一緒にのときには、ちよつと激しかったかも分からないね。

内閣と議会とのバランスがうまく取れていないというのは、議論がなく内閣の独壇場になるから、それがとても不安なんですよ。みんなで右へ行つたら、それはもうとんでもないことになりますよ。だから、誰かが反対のことを言つていないといけないから、激しく右へ寄れば、野党の論調は激しく左へ寄らざるを得ないんです。これが真ん中のことを言つていてくれれば、こつちも中道へ寄つていていいわけですよ。

○紅谷 その役割は、議会の中で野党なのか、あるいは自民党の中からののかですけれども、河野議長が危惧の念を抱かれての発言だつたわけですね。

小選挙区制の話と関係してきますが、小選挙区制になつてから特にそういう高い見地からの幅広い意見がなくなつてきたようにも感

じますが如何ですか。

○河野 小選挙区になったら、議席が一つしかないわけだから、二つというわけにはいかないから、一つに収れんしていつちやうわけですよね。だから、ほかの意見というのはみんな切り捨てられちゃう。それが小選挙区の最大の失敗ですよ。

○紅谷 議長が内閣と対峙するような挨拶をされても、自民党も含めて各党から議長の発言がおかしいという指摘は一切ありませんでした。

○河野 いや、腹の中では思っていたかも知れないな。

だけれども、議長の後半、衆議院事務局で作られた挨拶文というのは、僕が直さなくても、しばしばそのまま読んでいました。挨拶については、僕だけでなく天皇陛下の御挨拶も、結構、そうだと思うような挨拶が多かったですね。天皇陛下の御挨拶の中に、国際社会との関係とか、戦争に対する反省とか、そういう言葉がちりばめられるようになってきて、それはとても、今の上皇陛下の挨拶はよかったですって、僕は感に堪えていますね。

○紅谷 いわゆる戦後六十年決議に關してですが、平成十七年八月に「国連創設及びわが国の終戦・被爆六十周年に当たり、更なる国際平和の構築への貢献を誓約する決議」という本会議決議を行いました。いろいろなタイトルをくつつけたような決議ですけども、河野議長の意向が非常に強かった決議だと記憶しています。

○河野 かなり記憶が薄れているけど、平成十七年というのは、終戦から六十年、被爆から六十年の節目の年で、村山内閣のときの戦後五十年決議は、野党の新進党が欠席し、自民党からも随分欠席者が出て、共産党は反対するという、国会決議としては不規則な形で行われたし、参議院ではとうとうできなかつたんだよね。

○紅谷 鈴木恒夫さんが、河野議長の意を受けて野党と調整して、五十年決議を想起するという文言を入れた案文で決議が行われました。

○河野 今更ながら、何か長つたらしくてまとまりがないけど、そういう思いがあつての決議でした。

○紅谷 当時の新聞記事には、河野議長の指示があつたとか、希望でと書かれています。

議長の権限、在り方という観点からのエピソードでした。

《第七十二代衆議院議長》

○紅谷 小泉郵政解散による総選挙は、当初自民党が過半数割れをするのではないかと言われていましたが、与党で議席の三分の二以上を獲得し、圧勝という結果になりました。

河野先生も、今までの選挙の中で最高の得票数で予想をはるかに超えたと述べられていましたが、どんな選挙だったのでしょうか。

○河野 僕は与党でも野党でも選挙をやり、ずっと当選はしましたが、そんなに楽な選挙をやってきたわけではないんです。そんな中で、この選挙は議長で選挙だったから余裕をもって、後にも先にもこのときばかりは、十七万票近くの票を取った選挙でした。

この選挙は、小泉総理で郵政選挙と言われ圧勝しました。ところが、その小泉さんが自民党の党則によって一年で辞めるんです。国民の圧倒的な支持を得た人が党のルールで辞めてしまう。ちょっと不思議な気がしました。

小泉さんの後を引き継いだ安倍さんは、次の参議院選挙でぼろ負けするけれども、参院選は政権選択の選挙じゃないと言って辞めななんです。僕から見ると非常に対照的で不思議でした。

○紅谷 郵政選挙で得た与党の三分の二という数は、後に参議院選挙で衆参がねじれ状態となったので、衆議院で再議決可能な数となり、大きな意味を持つことになります。